



またね

鹿児島育英館高等学校 2年 谷口 凜

『またね』がちゃんときますように。』

私が幼いころから父とは離れて暮らしていた。頻繁に会うことはできず寂しかったが、父が帰り際にいつも言う「またね」という言葉に救われてきた。

昨年の五月ごろ、母から電話がかかってきた。夜の七時を過ぎたころで、ちょうど寮の夜間学習の準備をしていたときだった。寮に入ってもう二ヶ月もたつのに、心配症だなと思いつながらその電話に出ると、焦ったような母の声がした。そして聞かされたのは、「お父さんの状態が悪化した。」という言葉。

私の父は、私が中学生のときからガンを患っている。入院を繰り返して、ようやく最近安定してきたと聞かされたばかりだった。突然のことで理解できずにいる私に母は続けて「今から迎えに行くから帰る準備をしてね」と言つて電話を切った。それから後のことはバタバタであまり覚えていないが、母が迎えにくるまでの一時間が異様に長く感じたことだけははっきりと覚えている。

翌日、父の病院へと向かった。受付をして待つこと数十分、ようやく父の病室に入った私は言葉を失った。頬は痩せこけ、たくさんのチューブにつながれた父の姿。体を動かすことはおろか、話をするすらきつそうな父を見て涙がとまらなかった。

面会時間はあつという間に過ぎた。帰り際父は私の手を弱々しく握りかすれた声で「またね」と言った。すでに涙がかれるほど泣いたのに、どこから湧いてくるのか、また泣いてしまった。一週間もつか分からないと言われた父を目のあたりにして、私は『またね』がきますように」と願うことしかできなかつた。一週間後、願いは届いた。父の病状は安定し、先週よりも元気な姿を「また」見ることができた。今では歩けるまでに回復している。

先のことは分からないが、私は願ひ続ける。『またね』がちゃんときますように」と。